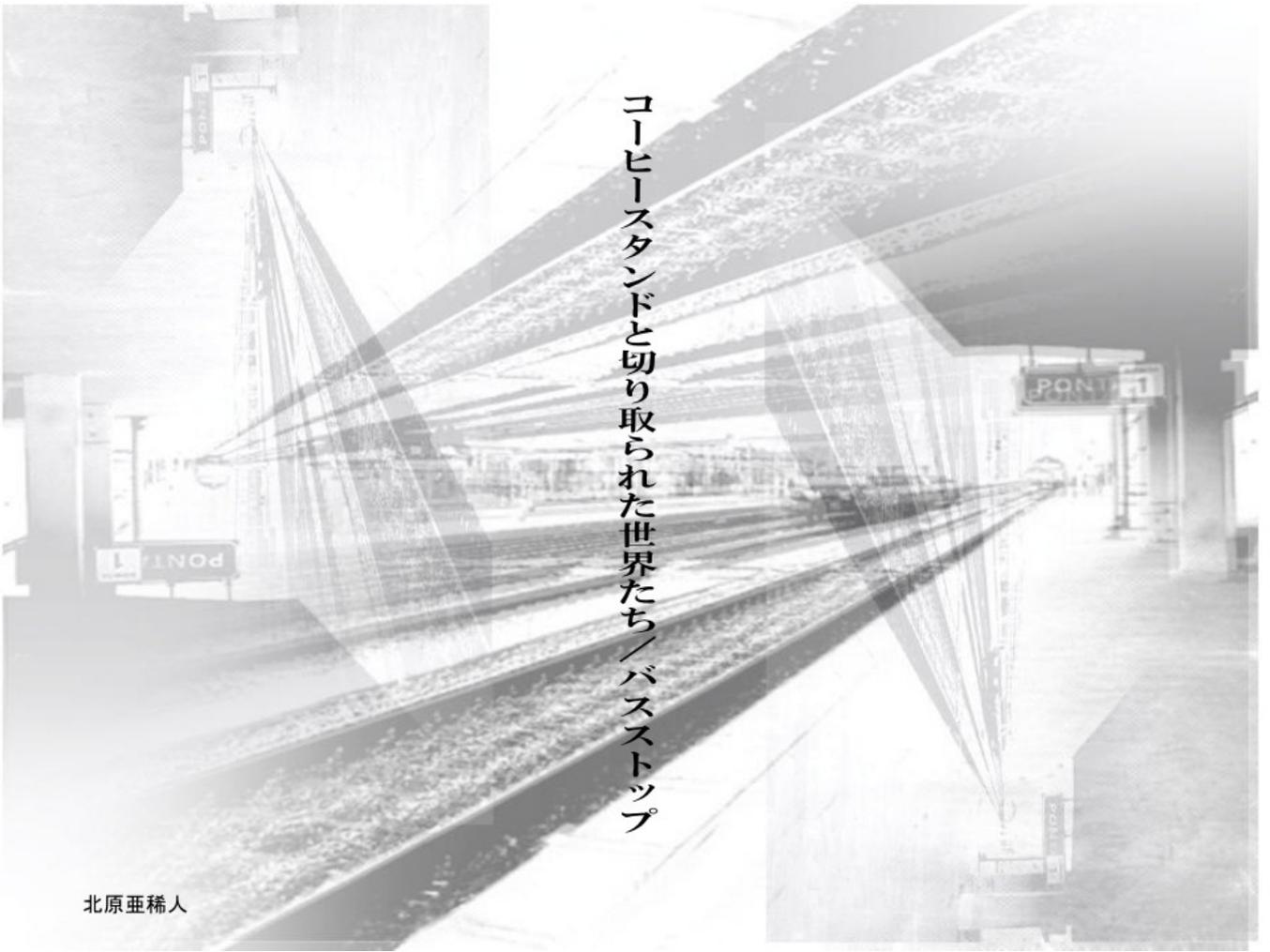


コーヒースタンドと切り取られた世界たち／バスストップ

北原亜稀人



## コーヒースタンドと切り取られた世界たち（前）

コーヒーショップと名乗って良いのかどうか。駅の一角、しょぼい壁で覆われていて、入り口から二列、縦に長いテーブルがある。椅子は無い。奥にレジが一台。コーヒーの種類だけはそこらへんのチェーン店並にある。あとは、毎朝運ばれてくる既製品のサンドイッチやベーグル。主な客層は朝、手早く朝食を済ませたい勤め人たち。名前はシンプルだ。その名もコーヒースタンド。安く早く、決しておいしくはない。グランドオープンからこちら五年勤めているわたしがそう言うのだから間違っていないと思う。それほど良い豆を使っているわけでもないし、温度や蒸らしにこだわっているわけでもない。普通だ。値段相応とも言う。百五十円で顔がほころぶようなコーヒーが飲めるわけがないのだ。その証拠に、これまで「おいしくない」というクレームをつけられたことはない。「ぬるい」と「遅い」は何度か。その程度のお店。コーヒーショップ……やはり、名乗ってはいけないと思う。ここはコーヒースタンドだ。それ以上でもそれ以下でもない。

\*

大学二年生の時に家の最寄り駅にグランドオープンして、オープニングスタッフとして勤め始めた。人並みに就職活動もしたけれど、入りたかった会社の試験に軒並み落ちて、やる気をなくしたまま卒業した。もし男だったら非常事態だったかもしれないけれど、幸い女で彼氏もいる。彼はまっとうな会社にまっとうに就職した。そのうち結婚すると思う。完全に養えとは言わない。パートぐらいには出る。そう考えれば、まともなわたしが就職して仕事にならなってしまうよりはフリーターで「待機」していた方が後々楽だ。そう自分に言い訳している。分かっている。これは言い訳。周りが必死にがんばっているのを横目に見ながらちんたら過ごして大学を卒業した自分を慰めるためには、言い訳の一つや二つ必要なのだ。彼は呆れた顔をしながらも、それでも「すぐに迎えに行くよ」なんて気取っていた。良いのだ。何かが上手くいっていないわけではない。わたしの日常は、わたしがフリーターであることを問題とせず、だいたい上手くいっている。

学校卒業によってフリーター化してからは週五回、平日毎朝出勤している。朝一番、五時半から午後二時まで。風景は毎朝殆ど同じだ。常連客が多くて、みんな忙しい。ブレンド、と乱暴にオーダーが飛んでくる。わたしはデカントからカップに注ぎ、蓋をする。百五十円を受け取る。「ありがとうございます」と言う。大体のお客は無言。会釈をくれる人二割、「ありがとね」とお礼を返してくれる人数人。駅の中にある地元密着店だから、一見さんは殆ど来ない。毎朝、毎朝、同じ。お客さん側にはいろいろあるのだろうけれど、わたしにとっては月曜日も火曜日も同じで、つまり平日と土日の二種類だけ。そんな毎日。きっと、うちのお客さんをはじめとした忙しい人々からすれば、すごく幸せそうに見えることだろう。申し訳なさを感じたりはしないけれど、彼が時々、冗談なのだろうけれど「おまえはいいよなあ」なんて言ってくるから、そういう時はグーで殴ることにしている。わたしなりに気にするところではあるのだ。

\*

ここ一年、趣味にしていることがある。お金もかからないし、その上仕事中の退屈をまぎらわせることが出来る。とても簡単な趣味だ。

我が職場、コーヒースタンドは朝のラッシュを過ぎると客足が殆ど途絶える。掃除をしたりゴミ袋を換えたりと細々とした作業はあるけれど、そんなものすぐに終わる。そこから一時間あまりが趣味の時間。レジカウンターから、駅の構内を歩く人々を眺める。ラッシュアワーを終えた駅を歩く人は、皆、何処か特徴的だ。わたしはそれを、ただ黙って観察する。

例えば、いつも午前九時半過ぎに出口方面へ消えていくサラリーマン氏。夜中に働いているのかもしれないけれど、いつも足の運びはしっかりと歩いて、背筋を伸ばし、前を見据えて歩いていく。わたしは想像する。彼は、上場はしていないものの地域でまずまずの規模の人材派遣会社に勤めているサラリーマンで三十五歳。この駅に隣接している駅ビルのテナントに登録スタッフをもっと使ってくれるよう営業で回っている。年下の奥さんがいて犬を一匹飼っている。子供はいない。奥さんは自分が不妊なんじゃないかと心配しているが、サラリーマン氏の反対で病院には行っていない。サラリーマン氏は、もし本当に奥さんが病気だった場合に今の暮らしを構成しているいろいろなものが破滅するんじゃないかと心配しているのだ。子供が出来るかどうかなんてそんな重要なことじゃないよ。君がしてくれるだけでいいんだ、なんて言って奥さんをなだめすかしている。そのせいで、奥さんとは最近ぎくしゃくとしている――言うまでもなく全部わたしの妄想だ。趣味。想像して、ストーリーをつけていく。フィクションにまみれた世界を切り取る。同僚たちは悪趣味だと言うけれど、良いのだ。誰に迷惑がかかるわけでもない。仮にサラリーマン氏がテレビで特集されるような大家族の主だったとしても、わたしを含めて誰も困らない。害のない、平和で穏やかな日々をただやり過ごす貧乏なフリーターにはうってつけの趣味だとわたしは思っている。

今日もサラリーマン氏は歩いて行く。今日は隣にわたしと同じくらいの年に見える女の子をつれていく。派遣スタッフ？ それとも、奥さんとのぎくしゃくに耐えかねて、ついに不倫開始？ もしそうだとしたら新展開だ。想像は羽根をひろげ、何処までも飛んでいく。最終回はどんなことになるのだろう。誰もいない荒野で奥さんと泣きながら抱き合うとか……いったい、どんなおもしろい経緯があればそんなことになるのやら。時々、あまりにも飛躍し過ぎて自分でもバカバカしくなるのがこの趣味唯一の欠点だ。

\*

百科事典嬢とホストくんは、ここ数ヶ月で一番のお気に入りの観察対象だ。彼女はいつも重そうな、分厚い何かの入った鞆を提げている。わたしがそれを勝手に百科事典だと決めた。別に意味は無い。百科事典嬢という響きが気に入っただけ。

無造作な黒い髪に薄い化粧、あまり飾り気のない格好で、週に二回か三回、決まって十時過ぎにホストくんと手をつないで改札から出てくる。ホストくんは、いかにもホストだ。高そうなスーツ、靴、時計。紅茶みたいな色の髪を入念に動かしている。夜の繁華街の片隅に生息しているのだろう。

百科事典嬢は学生だ。まだ二年生だけれど、自分はこれからどうすべきかを延々と悩み続けている。そう遠くない未来に自分も突入する就職活動に漠然とした不安を抱えている。

ホストくんはもともと彼女と同じ学部の子学生だったけれど、夜の街頭でたまに見かけるホストのスカウトを真に受けて大学を辞めた。それでも彼女との交流は途絶えず、なんだか少女マンガの登場人物のような恋愛が微妙に成立している。私はそう決めつけて、二人が通るたびに観察の目をこらし続けている。

百科事典嬢は、時々怪我をする。手や足に包帯を巻いて登場する。きっとホストくんは暴力を振るう男なのだ。別れば良いのに、とわたしは思うけれど、この手の問題がこじれやすく解決しづらいことぐらいは知っている。友達に似たようなのがいた。暴力を振るう側も振られる側も互いに歪んで、ぎざぎざになっていて、その凹凸が残念なぐらいにぴったりと噛み合っているのだ。そういう時、暴力も一つの日常になる。無くなると禁断症状になる。だから、早く

そして残念な日常を再開する。ちなみに今でも、その二人は付き合っていたりする。まあ、好きにすれば良いんだけど。

ホストくんと百科事典嬢の話しに戻ろう。

二人は、三回に一回ぐらいの割合で喧嘩しながら改札を出て通り過ぎていく。何を口論しているのかまでは聞き取れない。駅という場所は、アイドルタイムであってもざわめきが取まらない場所なのだ。遠目で見て、何かをやりあっているのは分かる。百科事典嬢が、その重そうな手提げでホストくんに殴りかかっているのもみたことがある。逆だったら通報すべきなんだろうなあ、なんて思いながら眺めていたら数分後には抱き合ってキスしていた。意味不明だ。わたしが彼と殴りあうような喧嘩をしたら二週間はひきずる。よく喧嘩をし、よく愛し合う？ わたしとは違う世界の住人であることは確かだ。ぴったりと噛み合っている。はずれない。壊れた歯車のようにぎしり、ぎしり、と音をたてながら、それでもその噛み合いは絶対に外れない。だからわたしは、レジカウンターから二人を見るたびに、冗談半分で言葉を贈ることにしている。

「どうぞ、末永くお幸せに」

見ている分にはとても面白いのでどうぞ定期的にやりあってください、なんて。同僚の言うとおり、確かに少し悪趣味かもしれない。この二人を観察している時に限っては少しそう思う。

\*

「結婚してくれないか」

転機は、わたしがフリーターと化して一年半目にやって来た。ずっと待っていた言葉。わたしを現状から逃がす、たった一つのキーワード。ずっと待っていたのに、妙に心にずしりと響いて、目に涙を浮かべて「はい……」なんて感動的な返事は出来なかった。場所もタイミングも良くない——彼のアパートで、二人でのんびりとDVDを見たその後——のだと、一応クレームをつけておく。

「いやさ、こういう、ちょっとした日常っぽいのおまえとずっと一緒にやっていきたいんだっていう趣旨なんだよ」  
なんか、後付けっぽい言い訳がついてきた。吹き出しながら承諾した。それが、今日から一週間前の日曜日のことだ。

わたしとしては、この話はこれで終わるつもりだった。あとは、結婚式のこととか、新婚旅行の行き先、二人で住む場所を見に行ったり、その場所にあわせて新しいバイト先探し……そういう、楽しくて面倒くさいあれこれを終えて、少しずつ主婦になっていく、そのつもりだった。それで良いという覚悟も出来ていた。なのに、そんなわたしの気持ちなんか関係なく、もらったばかりの婚約指輪をうっかりぶん投げたくなるような展開が、二日前にやってきた。

「転勤だそうす。さすがに拒否権ないんだけど……最悪な間の悪さだよな。場所は北京です。どうしようか、そんなメールが携帯にやってきたのが、お昼の休憩中のことで、どうしようかって何だよって感じだった。結婚延期？ 中止？ 彼が何に対して”どうしよう”なのか分からなかったから、”別に、わたしは何処でもいいよ”と送ってやった。”そうか、良かったよ”だって。きっと、すごく気持ちの入った”良かった”なのだろうことは分かったけれど、不思議と、届いたメールの冷やかな文字の並びからは少しもそれが感じ取れなかった。所詮デジタルなんてこんなものだ、なんて開き直ったところで何の解決にもならない。心がずうんと重くなった。

想像してみる。北京で兼業主婦。頭に浮かんだのは、すさまじい数の自転車と、同じ服を着た人々が往来する、たぶんかなり昔の中国像。我ながら想像力が無いなあとは思っただけで仕方ない。だって、行ったことがないのだ。北京？ 何があって、何が無いのだろう。わたしの父や母はどんな顔をするだろう。彼の勤め先の会社に泣きつく？ それとも彼に、やっぱり絶対行きたくない、なんてだだをこねる？ 彼はどうするだろう。単身赴任していくだろうか。それも嫌なんだけど。考えすぎて気持ち悪くなったから、週末まで保留にした。メールや電話じゃなく、直接彼と、事の重大さをゆっくりと話し合いたかった。

\*

金曜日。今日一日が終われば、明日は休み。彼と会う。話す。なんだか気が重かった。きっと彼は謝るだろう。そして、今会社を辞めることは出来ない理由を特盛りで説明してくる。私はそれを最後まで聞き、それから、大丈夫だよ、と彼を安心させる。彼はおそらくそれを望んでいる。心配性で、わたしがへそを曲げることを何より嫌がるのだ。その分、ものすごく優しい。わたしがより好む人間になろうと努力をする。つきあい出した当初からずっとそうだ。わたしも、その彼の努力に応えるために最大限、彼の前では優しくあろうとした。彼の投げってくるボール全てを受け止めるべくがんばってきたつもり。時々、とんでもない大暴投を放られた時にはケンカもあったけれど、まあまあ、波の穏やかな恋だったと思う。これからもそうであるはずだった。たぶん、次に会うとき、お互いに上手くやり過ごす努力をしないと、わたしたち二人とも波に飲み込まれて戻ってこれなくなる。そんな嫌だ。けれど、北京？ 全てを後逸せず受け止める自信は正直なところ、無い。気が重くて仕方がなかった。

今日もサラリーマン氏がいつものように通り過ぎていった。やけに客数の多い日で、いつも通りの分量を用意していたブレンドが途中で足りなくなって作り足した。

午後一時過ぎ、勤務完了まであと数十分のところホストくんと百科事典嬢が通り過ぎていった。何か、これまでとはひと味違うトラブルが起こったらしい。百科事典嬢は車椅子に乗っていて、それをホストくんが押していた。遠くからでも分かるぐらい、二人とも顔色が悪かった。何かがあったのだ。あまり良くないことなのかもしれないけれど、そのせいなのか、それともその「おかげ、なのか、二人のギザギザはこれまで以上にがっちり噛み合っているようにも見えた。だからいつもとは少し変えて、「頑張れ、お幸せに」と言葉を贈った。

二人からすればきっと心外なのだろうけれど、少しだけ、気持ちが前を向くのを感じた。

## コーヒースタンドと切り取られた世界たち（後）

不思議なことなんか起こったりしない。時間が経つ。物事が順番に、あるべき場所に、あるべき形で収まる。それだけの事だ。これは、順序が少し逆になるけれど、わたしが夫と入籍して北京に発つその少し前に父が教えてくれたこと。結果的に、わたしの人生のメインテーマみたいになった。

予想通り、彼はわたしに謝り、事情を説明し、会社を辞めることが難しい理由を延々話してきた。わたしは予定通り、「大丈夫だよ」と答えた。

わたしの両親も、覚悟はしていたのだろう。いきなり海外に連れ去られていくことには驚いていたけれど、それほど反対も無かった。場所とか形とか、そういうものをあまり大事にしない人達なのだ。わたしにもその血は色濃く受け継がれている。父が教えをくれたのは、この時だった。

「全部、物事ってのはそうなるべくしてそうなるんだ。だから反対しない。あるべき場所に、あるべき形で収まれば良いさ」

この件に関する感想らしい感想はこれだけだった。後は、早く孫に会わせてくれたとか、結婚式は出来るだけ日本でやってくれ、だとか。自分の時は母親への手紙を半ば嫌々読み上げさせられて、嫌々だったのに泣いてしまった事だとか、そういう、明るくて前向きな話だけ。

時間が無くて、結婚式は保留という形にした。なるべく早く日本で行う、とだけ決めて、北京。想像していたよりも不自由なく暮らせた。三年暮らして、夫が会社を辞めることになったから帰った。わたしの身体は子供を産むのに適さないことが分かった。二人でずっと一緒にいようね、なんて何の慰みにもならないようなことを言われた。その言葉が嘘ではないことを証明したがっているかのように、夫はわたしを、色々なところへ連れていってくれた。日本中を十回ぐらいに分けて旅行した。アメリカにも行ったし、オーストラリアにも。ヨーロッパ周遊もした。二人で、数えきれないぐらいの思い出づくり。あるべき形？

「大丈夫？」

夫に何度も訊かれた。そのたびに、「大丈夫だよ」と答えた。何が大丈夫なのかなんか、分からなかったし、分かる必要もなかった。こんなの、合言葉だ。

\*

それから十年過ぎた。老けた。夫は自分で小さな事務所を持ち、わたしもそこで一緒に仕事をするようになった。もともと痩せていた夫は、この時期を境に、ますます痩せて頼りなくなった。

時間が経った。色々な物事は、順番に、あるべき場所へあるべき形で収まっていく。わたし達がそこにどんな感想を抱くとか、そんな事は関係無い。やってくる出来事、そして、去っていく出来事は皆、市役所よりも冷淡に、肅々と、すべき事だけをして去る。多分そのうちに、わたし達も。

父親が七十五で亡くなって、実家近くの葬祭会館で通夜があった。久しぶりに降り立った故郷の駅。半年に一度の約束なんか当たり前のようには守られなくて、もう実家へは五年ぐらい足を向けていなかった。

「コーヒースタンド、が無くなっていて、その場所には、鉄道会社が運営する小さなコンビニが設置されていた。暇そうな顔をしたアルバイトの小僧がレジで突っ立っていた。わたしがどれだけ残念な気持ちになるうとも関係無いのだ。分かっている。時間は流れた。ちゃんと諦めている。

通夜、会食。近くのホテルで一泊して、翌日に葬式、火葬。父親が、煙になって空へのぼって行った。母親はそれを、言葉もなく、ただじっと見送っていた。わたしもその横で見送った。夫が肩を抱いてくれた。わたしが哀しみにて卒倒するとでも思ったのだろう。わたしがへそを曲げることを怖がる夫。わたしが、いつものわたしでなくなることを嫌がる人。わたしはいつも通り、「大丈夫だよ」とだけ答えた。こんなの、どうかしている。

\*

痛みもかゆみもないままいきなり気を失って、病院に担ぎ込まれた。父が死んで、それを追いかけるように母親も死んだ、その六年後のことだ。脳腫瘍だと言われた。手術をして取り除くけれど完全に切り切ることは出来ず、再発の可能性が常につきまとうらしい。

手術をした。成功した。後遺症は幸い、殆ど残らなかった。治験とやらに協力をした。やたらと高い、作用の強い薬を飲むことが義務付けられた。放射能治療もした。毛が抜けた。自分で言うのも何だけれど、変わり果てた姿になった。食欲なんか殆どなくなった。退院後は自宅療養になった。夫は、自分の事は何でも自分でするようになった。自分で洗濯をし、自分で食事を作り、自分で掃除をした。

そのうち、夫が二週間に一度ぐらいのペースで帰って来なくなった。仕事が忙しくなった、だって。仕方が無い。不満ぐらいはたまる。薬代、それに月に一度の検査。医療費はかさんでいくばかりだ。せめて外で息抜きをしてもらえらなら、わたしは何も言わない。変わり果てたのだ、何もかも。これも、あるべき形なのだろう。父の教えは、わたしを随分諦めの良い人間にした。

\*

趣味を再開した。夫がいない昼の時間帯。駅前に新しく出来た、テラス席のある喫茶店に行く。一番安いブレンドを注文して、席につく。道行く人々や喫茶店のアルバイト君たちに、勝手気ままな物語を押しつけていく。晴れている日、薄い曇りの日、大雨の日。毎日、沢山の人が、それぞれに色々抱えて、わたしの周りを通り過ぎていく。

サラリーマン氏、ホストくんや百科事典嬢。かつて、わたしのつくるお話の中でメインキャストを務めた彼らの姿は当然ながら無かったけれど、ちゃんと、その代わりになる人々が現れた。不倫ちゃんに、人待ちのじい様。不倫ちゃんはサラリーマン氏の類型だ。いつも、せかせか、カツカツと道に行く。目には見えない何かを追われているのだ、きっと。

三十五歳、独身、結婚は諦めている。建築デザイナーの事務所です仕事をしていて、そこの所長の不倫相手になっている。二週間に三週間に一度、情事に耽る。そして、自らの境涯を自分で笑うのだ。ああ、今日もあたしは何やってるんでしょね、なんて。けれど、彼女に今を捨てる程の勇氣は無い。金があって、仕事があって、自分を必要としてくれる人もいる。ただ、形がそこらへんの人のそれよりもほんの少し歪なだけ。変える必要な何か何処にもない。彼女はそう考えているのだ。

正直、この辺りまで考えて、わたしは不倫ちゃんについての興味を失ってそれ以上の観察をしなくなった。好きにすれば良いさとも思ったし、彼女がどんな生き方をしようとしてわたしには関係の無いことだ、なんて。実際はただちょっと、羨ましかっただけだ。もう、今のわたしにはああやって、ヒールをかつかつ鳴らして歩くことなんか出来ない。医者に言われているのだ。体力も落ちていて危険だから、なるべく歩きやすい靴を履くように、と。

それよりも、人待ちのじい様だ。目を離れたらその瞬間からもう二度と会えないんじゃないか、なんて不安な気持ちにさせられるじい様。枯れ木のような身体つきで、細い。鶉がらのような面頬に村。風に吹かれたり、太陽に照らされ

たりしながら、じい様はいつも誰かを待っていた。駅前の街かどで、表情一つ変えずに、ただ、ただずっと待ち続けた。

彼は、今はもう死んだ自身の妻を待っているのだ。彼はちゃんと知っている。妻はもう死んだ。葬式だって済ませた。彼はその事を忘れた。忘れたという事にした。そうしなければ、生きていられなかったから。市役所の人間が訪ねてこようと、古い友人と会おうと、彼の気持ちは晴れない。誰と共にあっても、彼は一人だった。妻が彼の全てだった。若いころは美男美女として周囲から持て囃され、人並みよりもいくらかマシなんじゃないかと思われる半生を二人で歩んだ。子供はいない。妻の身体が、それに適していなかったのだ。

二人で色々なところへ行っただ。若い頃、仕事の都合で海外に長く住んだこともあった。四十歳になる少し前、独立した事務所を作った。結婚式を計画している人達と、ウェディングプランナーを引き合わせるのが仕事だった。

彼自身は、結婚式をあげなかった。若い頃、いよいよ結婚という段になって転勤を命じられて、それを保留にしたまま機会を逸した。彼はそれを、人生で最も大きな失敗だったと後悔している。披露宴にひねりがなくとも、準備不足で周囲に迷惑をかけようとも、結婚式だけは強行すべきだった。彼は後悔している。妻が亡くなるその時、何度も、何度も謝罪した。妻はただ笑って、「大丈夫だよ」と言い残し、笑顔で逝った。彼は全てに耐えきれなくなり、こうして、絶対にやって来ない妻をただ待ち続けている。

……悪ふざけが過ぎた。こんな事、すべきじゃない。カフェのテラス席から見えるじい様の寂しそうな背中から始まった物語。こんなただの妄想だ。なのに、わたしは今こんなにも泣きたくなっている。そして、怖くもなった。大丈夫だよ？ 何が大丈夫なんだろう。

大丈夫だよ。自分に向けて言う。大丈夫だよ、大丈夫だよ、大丈夫だよ、大丈夫だよ。それに、無理矢理に前向きな考え方をするなら、死して尚街かどで帰りを待ってもらえるのは結構幸せな事だ。多分、きっと。

だから、じい様にも言葉を贈ろう。そっと、聞こえないように。  
「大丈夫だよ」

\*

物事があるべき場所に、あるべき形で収まっていく。その日、わたしはきっと「大丈夫だよ」と笑って言うだろう。わたしには分かる。それが、あるべき形。それが、わたし。

百科事典嬢とホストくん。サラリーマン氏と浮気相手の女の子。不倫ちゃん。わたしと夫。じい様と、今はもう居ないその妻。みんなそれぞれに、あるべき場所に収まっていく。それなら、それで良い。それは間違った事じゃない。じい様の背中を眺めながら、まだ温もりの残っているコーヒーを口に含みながら、わたしは今、そんな事を考えている。

## バスストップと調香士

バス停の片隅にはベンチが一つ置いてあって、そこにいつも座っている老人がいた。そのバスにとっては終点にあたる停留所で、市街の中心地。朝のラッシュ時には、バスが停留所につくたびに何らかの刑罰を終えたかのような人の群れがどさりと吐きだされてそれぞれ行くべき場所へと向かう。老人は、そんな光景を見ているようなそうでないような、ぼんやりとした顔つきで眺めていた。

朝夕も天気も関係なく老人はずっとその場所に居続けていた。平日、職場に出るために私がそのバス停を使う時には毎日欠かさずにいたし、同じ職場の友人によると、休みの日でもちゃんといららしい。酷い雨降りの日はずぶ濡れになりながら相変わらずの遠い目をしていたし、台風が近づく強風の日は、かぶっているハットを手で押さえながら、やはり何処かを眺めていた。

よれよれのスーツに、同じぐらいくたびれたハット、塗装が剥げた古いステッキに、銀縁の丸眼鏡。擦り傷だらけの革靴は、よく見ると左右が別の靴だった。多分、行くべき場所も帰るところもない種類の人なのだと思う。その良し悪しは私の興味の範疇じゃないけれど、世の中にはそういう人が確かにいる。毛嫌にする理由は無いけれど、別にお近づきになりたいとは思わないし、思えない。

「おかけなさい。きっとすぐに良くなるだろう」

老人にそう言われたのは、夏の盛りのことで、私は朝から体調が悪かった上にラッシュのバスで揺すられて今にも倒れそうな状態だった。きっと、酷い顔をしていたのだろう。バスから降りるなりそう言われた。座れ、と言われれば何処へでも座り込みそうな気分が悪さだったけれど、それでも少し逡巡した。その老人に声をかけられているだけでもバス停から早足でそれぞれの会社へと向かう人々のうち何人かが私の方を見ていた。隣に座りでもしたら、きっと、もっと多くの人が私のことを記憶に留めるはず。もしかしたら同僚にも見られるかもしれない。そんなことになったら、きっと私は会社を辞めたくなる。だって、完全な誤解なのだ。私は皆と同じ、老人を無視してさっさと仕事へと向かう極めて一般的な人間だ。バス停に無目的に居続けるおかしな老人と一緒にしないでくれ……なんて、こんなにはっきりと嫌悪しているわけでもないけれど、じつじつと探ってみれば、多分そういう気持ち。皆と違う行動に出ることがただ怖いだけとも言えるかもしれないけれど。

結局座った。あれやこれやの迷いなんかどうでもよくなるほどに体調が悪かったのだ。腰かけると、良い香り。シトラス系？ 心に新鮮な空気が行き渡るような感じ。洗濯なんかしたことがないように見えるジャケットやスラックスからはもっととんでもない悪臭が漂っているものだとばかり思っていたからちょっと意外だった。

「香りというものは、それ自身が扉にもなるし、また、鍵にもなりうる」

老人はそう言い、枯れ果てた樹皮のような拳の中握っていた、飾り気のない小瓶を私に見せてくれた。

「どうやら、貴方はこの香りと相性が良いらしい」

にこりと老人が笑ったから、私もあまり得意な表情ではないけれどにこりと笑った。鞆の中から携帯を出して、会社に連絡を入れた。具合が悪いので少し休んでからいきます。いつもだったら、生理中だってそんなに簡単に休んだり遅刻したりしないのに。

\*

十五年前ぐらいまでは調香師として第一線で働いていたらしい。定年で引退してそれから十年ぐらいは大人しくしていたけれど最近はどうして外に出続けている。近くにアパートを借りていて、終バスを見送ると帰って眠り、また始バスの頃に起き出してきて此処に座る。それが、老人の教えてくれたプロフィールだった。

「妻に先立たれた時、家の中が線香の匂いで満ちてしまったんだ。つまりそれは死の香りなんだ。妻には悪いが、それに耐えられなかったから家を捨てた。此処は色々な匂いが落ちている。私はそれを一つずつ嗅ぐ。時々、そう、扉が開くんだ」

私も自分のことを話した。老人に、「貴方はどんな人なのかな？」と訊かれたから。話したくはなかったけれど仕方が無かった。元々は私が「どうしていつも此処に座っているんですか？」なんて余計なことを訊いたのが悪いのだ。

私。二十七歳、女、独身。缶詰をひたすら製造する会社の受付を新卒として入社してからこちら続けている。あちらこちらからやってくる来客をより分けるのが仕事だ。お約束はございますか？ なんて言って。一日に少なくとも二人は飛び込みの営業がやってくる。どうせなら、うちみたいな受付を設置していないもっと小さなところに行けばいいのに。

先の事なんかは考えても悲しくなるだけだから考えない。十年後には結婚していたいけれど予定もなければ相手もない。もし今のままの状況私が仮に突然死したら悲しむ人間は十人もいないはず。仕事は好きだけれど死ぬまで同じことをしていたいとも思わない。だからと言って他に何かやりたいことがあるわけでもない。それが私。

私がいつも使うバスよりも一台遅い便がやってきて、ひとかたまりの群衆を置き捨てていった。沢山の人が私と老人の顔を見て、それから歩いていく。今日は仲間がいる、とても思っているのだろう。少しずつ体調が良くなっていくにつれて、そんな類の人々の目線なんかどうでもよくなってきていた。人々を降ろしきったバスが行き先表示を「回送—out of service—」に変えて走り去っていった。ディーゼルエンジンが身軽になった喜びを表すかのようなうなり声をあげ、周囲にガスの臭いが広がる。老人はそれを喜ぶかのように目を細めていた。

「大きな車と言うのは、可哀想だ。皆重宝がって乗るくせに、臭い、煩いと皆に文句を言われる。貴方もそういう気持ちになる時があるでしょう？」

「それはまあ……なりますけど」

「そういう時はね、気持ちに一枚の扉を立てれば良い。とても、とても簡単なことなんだ。排気ガスの臭いが我々の生活と切り離せない以上、最も簡単で理想的な方法かね」

老人はジャケットの胸ポケットから先程のものとは違う小瓶を取り出し、その蓋を開いた。

「これはアロマオイルだね。ベンゾイン、つまりは安息香だな。甘く、どっしりと重い香りがする。この深遠な香りが、気持ちの中でも特に壊れやすい部分をそっと守ってくれる」

老人は私の鼻先にその瓶を近づけてくれた。確かに言う通り、甘くて強い、眩暈のするような匂いがした。私は少し苦手だ。それに、気分が良くない時に嗅ぐべき匂いではない気がする。

「あまり貴方には向かない匂いだったようだ。失礼」

そう言って老人は瓶に蓋をし、元通りそれをポケットに収めた。

「いつもそうやって、何種類も香水を持っているんですか？」

「いつもさね。必要に応じてではあるけれど、五種類か六種類ぐらい。その場所に適した香りを探したり、その人に適した香り……更には、その人の、その時の気分に適した香り。ぴったりとはまるものが見つければ嬉しいし、なかなか見つけられない時には残念な気持ちにもなる。趣味だが、これまで生きてきた証のようなものでもある」

気分は殆ど異常なし、と言えるぐらいに復調していた。そろそろ会社に行こうと思います、と老人に挨拶をして立ち上がると、老人はまた先程とは別の小瓶を取り出し、それを渡してきた。

「今の貴方には相応しくないからまだ開かないように。今度ね、元気で、時間があって、特にすることがないような……出来れば午後が良い。聞いてみなさい。私が諦めとった。貴方にぴったりの香りだから」

いらなくなればトイレにでも流してしまえばいい、と言われたから一応、受け取っておいた。この場で頑なに拒むほど邪魔になるものでも無かった。私にぴったりの香り、なんていう、街のあちらこちらの化粧品店なんかでさんざん耳にするようなフレーズには一つも心を動かされなかったけれど。

\*

夏が終わって、秋が過ぎて、そろそろ冬物を出さないと、なんて思っているうちに年末になっていた。寒いのが得意でない私としては暖冬傾向おおいに結構……自然保護団体が耳にすれば怒り出しそう。年がよいよ押し迫ってくると、ちゃんと寒くなった。これでお前も満足だろう？ と何処かにいる自然保護団体とやらの悪態をついてみる。気持ちがくだらないことでぎすぎすとするのは全部寒さと忙しさのせいだ。

缶詰工場は十一月頭から年末まで結構な激務になる。贈答品や年越し用の保存食なんかの特需のせいだ。私は受付だからあまり関係は無いけれど、全社を挙げて就業時間を一時間半延長する、などという馬鹿げたルールがあるせいでしたらりと影響を受ける。心を亡くすと書いて、忙しい。この時期になると、本当にそうだなあ、なんてしみじみと思ったりする。ほんの一時半帰るのが遅くなるだけでもえらい違いだ。

例の香水瓶はずっと鞆に入れたままだった。元気で時間があって特にすることのないような午後、なんて私にとっては異世界だ。いつでもどれかが欠ける。時間が有り余っているくせに体調が良くない時もあるし、元気で活力に満ち溢れているのにそれが深夜遅くて、さてこの元気を何処に捨てればいいのか……なんて時も。世の中が上手くいかない、なんてあまりにも多くの人が言うことではあるけれど、もうちょっとなんとかならないものかと私はいつも思うのだ。

老人とは平日毎朝、毎夕バス停で会う。会話はしない。私自身にその理由が無かった。ベンチに座っている時間も無かった。老人は私と目が合うたびににこりと笑う。仕方がないから私も、にこりと笑う。得意じゃないって分かり切っているのに。だから、なるべく視線は合わさない。心を亡くすと、こういう情けない結論に人は至る。

\*

いよいよ、と言うほど大げさなことではないかもしれないけれど、私は今、例の香水を開こうとしている。年末年始の多忙をようやく乗り越えた一月の三回目の休日で、体調の極めて良い午後。特にやるべきことはなかった。会社の同僚と買い物に行く約束をしていたけれど、向こうが前夜に転んで足を挫いたために中止になっていた。冷え込みの厳しい日だったけれど快晴だった。状況良好、好機到来。と言うよりも、今日を逃したらもう永遠に開かないような気がする。

家のリビング、テーブルの上に小瓶を置き、そっと蓋を開く。

穏やかな、木漏れ日のような香りが最初感じられた。強くはない。注意深くしていなければ分からないような、かすかな芳香が小瓶の口から立ち上り、部屋をゆらゆらと漂う。空気が透き通っていく。築十五年家賃八万円1LDKの部屋の屋根や壁と一緒に透き通っていく。私は何処とも分からない大きな木の下で、刻々と姿を変える木漏れ日に顔を向け、目を閉じて深呼吸をする。私の身体もまた透き通っていく。遠い世界に運ばれる。必要なものだけがそこにはあって、私は一番小さな単位まで分解される。私の中にうずたかく積もっている気持ちの山が次々に壊れて、何処かへとばらばらになって飛んでいく。何でも出来るような気持ちになってくる。何処へでも行ける。何も怖くない。今日の一歩先に明日がある。後ろにはちゃんと、昨日、一昨日、先週。これからも、もうしばらくは大丈夫。私が、透き通っていく。

\*

翌日朝、バス停にいつもと変わらない姿で座っていた老人に香水を開いたことを話した。

「そう。どうでしたかな？」

貧弱な語彙でもって私は香水から感じたイメージを伝えた。老人はただ笑うばかりだった。

「貴方がそう言うのならきつとそうなのでしょう」

「あれ、なんていう香水なんですか？」

「名前はないですな。何処かで売っているものでもないし、自作だよ。それに、もう代えはないしね。随分昔に作ったものだからもう配合を覚えていないし、何より、引退した身では材料を集めるのもなかなか大変でね」

「そうなんですか？ 良かったからもし売ってれば買おうかなと思ったのに」

「そう。ありがとうね」

老人がにこりと笑う。私も、にこりと笑う。これまでよりはちゃんと笑えた気がする。私の降りたバスが、路線の反対側の停留所の名前を行き先表示板に出し、走り去って行った。